

研究速報

スキルス胃癌における内因性 estrogen 局在の
検索の試み—酵素抗体法を用いて—

上原 泰夫 小島 治 間島 孝 竹本 洋一
藤田 佳宏 高橋 俊雄

スキルス胃癌は若年女性に多く、その予後も比較的
不良である。この事実からスキルス胃癌の増殖、進展
における性ホルモンの何らかの関与が考えられている。
今回著者らは近年 Shimizu ら¹⁾により紹介された
酵素抗体法を用いて、スキルス胃癌における内因性
estrogen (E₂) の局在について検討を加えたので報告
する。

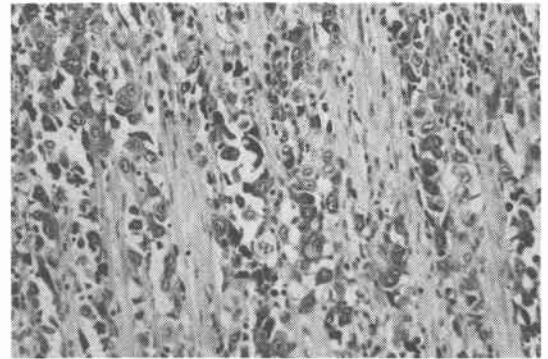
検索対象及び方法：当教室において昭和48年より同
58年の間に経験されたスキルス胃癌のうち、今回病理
学的検索が可能であった28症例が検索対象とされた。
内因性 E₂局在の検索は Shimizu らの方法に準じ行わ
れた。なお一次血清には Miles-Yeda 社製抗ヒト17β-
estradiol-6-BSA ウサギ血清を用いた。なお上記症例
のうち10例では、近傍非癌部粘膜組織における E₂染色
の判定も行われた。

結果：図1は内因性 E₂染色陽性例である。腫瘍細胞
の細胞質が主に染色されており、一部の症例では核に
おいても染色陽性であった。染色性の判定は腫瘍細胞
における染色陽性細胞数と染色強度により、+、±、-
の3段階で行なった。なお今回の検討では、+の症例の
みを E₂染色陽性とした。

今回の検索対象28例中、E₂染色陽性であったのは7
例(25%)であった。一方、非癌部近傍粘膜組織にお
いては E₂染色陽性例は認められなかった。性別での
E₂染色性の比較では、染色陽性率は男性で30% (6/
20)、女性で13% (1/8)であり、男性で陽性率は高か
ったが統計学的に有意ではなかった。

考察：組織内エストロジェンリセプター (ER) の局
在に関する検討は、近年各種臓器の悪性腫瘍において
試みられている。しかし、その多くは生化学的手法に
よるもので、新鮮標本が必要であり、また約1gm 程度
の腫瘍量が必要とされるなどの制約も多い。最近、
Shimizu らにより、従来のパラフィン標本を用いた内
因性 estrogen 局在の検索のための手技が報告された。
本手法では細胞単位での検索が可能であること、
retrospective な検討が可能であることなどの利点が

図1 スキルス胃癌における内因性 estrogen 染色陽性例



考えられている。一方、北岡²⁾は生化学的手法にて、
スキルス胃癌の20%に ER が存在すると報告してい
る。われわれの検討では内因性 E₂染色陽性率は25%で
あり、北岡らの報告と同程度であった。北岡らは ER 陽
性例は全例女性であったとしているが、われわれの検
討では男性で E₂染色陽性率が高かった。この点につ
いては今後さらに検討が必要と考えられる。スキルス胃
癌では線維成分の増生が著明であるため、生化学的
ER 測定法での cut-off 値の設定にも問題が生ずる可
能性もあると考えられ、本酵素抗体法による内因性 E₂
染色はスキルス胃癌における ER の存在の証明の有
用な手段になりうる可能性があり、本染色法とホルモ
ン依存性との関連の検索を含め今後さらに検討を加
えたい。

索引用語：スキルス胃癌

文献：1) Shimizu M, Wajima O, Miura M et al :
PAP immunoperoxidase method demonstrating en-
dogenous estrogen in breast carcinomas. *Cancer*
52 : 486-492 2) 北岡久三, 吉田茂昭, 大倉久直
ほか：胃スキルスの内分泌化学療法, 代謝 20 : 237
-248, 1983

LOCALIZATION OF ENDOGENOUS ESTROGEN IN SCIRRHUS TYPE OF GASTRIC CANCER TISSUE.
Yasuo UEHARA, Osamu KOJIMA, Takashi MAJIMA, Yohichi TAKEMOTO, Yoshihiro FUJITA and Toshio
TAKAHASHI The First Department of Surgery, Kyoto Prefectural University of Medicine
<1985年2月13日受理> 別刷請求先：上原泰夫 〒602 京都市上京区河原町広小路上ル梶井町465 京都府立医科大学
第1外科